

博士学位申請論文審査報告要旨

申請者氏名	寺嶋 雅彦
学位の種類	博士(文学)
論文題目	予定調和の哲学—1686年から1705年にかけて、 G.W.ライプニッツは知的交流に基づき、どのように真理へと接近したのか—
審査要旨	<p>論文は G.W.ライプニッツ(1646—1716)が「予定調和」という思想を彫琢する過程を、一定の期間内(1686年から1705年)に限定して詳細に検討した研究の成果である。ライプニッツはみずからを「予定調和の哲学者」と称していた。これは、彼の中心的思想が「予定調和」であることを意味している。「予定調和」は、基本的には、実体間の一致および魂と身体の結合を説明するための概念である。しかし、この思想は、彼のモナド論などの所説に比して、これまで本格的に研究されることが少なかった。それは、第一に、ライプニッツの同時代のキリスト教界から異端的なものと捉えられ批判されたからであり、第二に、20世紀の現象学的研究動向においても分析哲学的研究動向においても、関心をもたれなかったからである。しかし、この状況を変化させたのが、Glowienka の「調和」にかんする研究である。本論文は、この先行研究を踏まえ、それを批判的に乗り越えるべく、予定調和という思想にライプニッツがどのようにして到達したのかを明らかにすることを目的としている。</p> <p>本論文で方法として採用されるのは、ライプニッツを、彼を取り巻く知識人の中に置き入れ、1686年から1705年の期間に書簡などによって行われた知的交流に基づいて、彼の思想の成熟を見定めるという手法である。扱われる知識人は、第1章でアルノー、第3章でフシェ、第4章でラミ、第5章でベール、第6章でマサムと多岐にわたる。これは、ライプニッツ哲学にかんする研究としてはたいへん独自性ある手法である。また、ベールやマサムに対してライプニッツが反論する書簡は、これまで邦訳が存在しなかったものである。なお、本論文は、上記の人物との書簡の往復に加えて、ライプニッツの著作をも検討の対象としている。具体的には、第1章で『形而上学叙説』、第2章で『実体間の本性と交渉、および、魂と身体間の結合についての新たな説』、第6章で『人間知性新論』、ならびに『生命の原理と形成的自然』が論じられている。</p> <p>本論文の哲学史研究上の成果は、第一に、「予定調和」という概念の変化を指摘したこと、第二に、「予定調和」概念の論理的・時間的な導出過程にはなお検討の余地があることを指摘したこと、第三に、ベールとの書簡の往復を介し、さらにはマサムへの書簡において、「斉一性」概念が導入されることによって「予定調和」の思想が拡大使用される可能性が拓かれたことを明らかにしたことである。また、ライプニッツ研究上の成果は、彼が同時代人との知的交流を介して「予定調和」概念を彫琢する様を見定めることで、彼の哲学実践における「対話」の重要性を確認したことである。</p> <p>さて、本論文の公開審査会は、2023年1月21日(土)14時から、早稲田大学戸山キャンパス33号館第10会議室で開催された。当日は、主任審査委員による趣旨説明、論文執筆者による論文紹介に続いて、審査委員と論文執筆者との質疑応答が行われた。</p> <p>第一の審査委員は、ライプニッツ研究者の立場に基づいて質問を行った。まず、審査委員から、本研究が世界のライプニッツ研究のトレンドにおいてどのような位置を占めるものかが説明された。それによって、本研究が世界の研究にも寄与できるオリジナリティをもつものであることが確認された。次に、ライプニッツ哲学における「予定調和」説の核心になにが存在するかが問題となった。質問者は、それを実体間の一ならびに魂と身体との一致に見定めているが、論文執筆者は、むしろそれらを踏まえつつも、さらに広がりをもつ概念として「予定調和」を捉えられること、また、それを可能にしたのが「斉一性」概念の導入で</p>

あることを主張した。次に、「予定調和」を含む「調和」という概念でライプニッツが何を考えているか、それが「一致」などの概念とどのように異なるのかが問題となった。この点について、論文執筆者の回答は明晰さを欠き、この点は、今後の課題とする必要があることが明らかになった。さらに、執筆者が重要視している「斉一性」概念について、それは「予定調和」の内包ではなく外延とみるべきものであり、その点で、「斉一性」概念は「予定調和」の説明原理なのではないかと指摘された。この点について、論文執筆者は当該概念の重要性を再度主張した。最後に、論文中で執筆者が使用する「雑食性」という表現について、それがライプニッツの思想にそぐわないことが指摘された。ただし、質問者と論文執筆者が、ライプニッツは最良の学説や説明を積極的に取り入れているという同一の事態をみていることが確認された。この質疑で、第一の審査委員と論文執筆者との論点の相違は、審査委員は「予定調和」概念を形而上学的な概念として捉えているのに対し、論文執筆者はそれを形而上学のみならず、より広い範囲に広がり得る概念として捉えているところに存することが明らかになった。

第二の審査委員は、アラビア哲学と宗教哲学の観点から質問を行った。まず、ライプニッツの「奇蹟」理解が、アヴィセンナなどのそれと異なることが指摘された。この点については、論文執筆者が、ライプニッツが奇蹟を一貫して自然の法則的秩序を乱すものと考えていることを説明した。次に、ライプニッツの「機会原因論」に対する反論が、アラビア哲学における「機会原因論」の理解と異なることが指摘された。この点について、論文執筆者はライプニッツの充足理由律を用いて答えた。さらに、ライプニッツの「予定調和」説は、一面で、キリスト教的なものであるにもかかわらず、イエスの役割を上手く説明できない点が指摘された。この点は、論文執筆者にも十全な回答を準備できていないものだった。質問者は、さらにライプニッツが理神論的であることを指摘した。この点について、ライプニッツの「神」理解は理神論を超えた内容をもつものであることが答えられた。

当日の公開審査会では、さらに一般参会者との質疑応答も行われた。そこでは、ライプニッツの「予先形成」の議論と「予定調和」説との関係なども話題になり、それは今後の研究の展望を拓くものでもあった。さらに、細部にわたる指摘も行われ、「異常」と「超常」の相違なども話題になった。

公開審査会終了後、審査委員全員は会場を改め、あらためて本論文について議論した。この論文にはいくつかの弱点というべきものが含まれているが、それはアメリカを中心とするライプニッツ研究の現状を反映したものであり、本論文の価値を毀損するものではないことが確認された。他方、本論文は、ライプニッツ思想の核心を冒頭に掲げることなく、論争の追跡に終始しているがゆえに、ライプニッツ哲学をすでに正確に理解している読者にのみ伝わる記述内容になっていることが指摘された。この点は、論文執筆者も自覚しており、本論文を著書として刊行する際には、さらなる工夫が必要であることで、審査委員の意見は一致した。以上の指摘を踏まえてなお、今回の研究は、世界的な研究動向にコミットしながら、それを前進させることに成功したものとして高く評価されるべきものであることについて、審査委員の意見は一致をみた。その点で、本論文は、博士(文学)の学位を授与するに値するものであることに、審査委員全員は一致した。

公開審査会開催日	2023年 1月 21日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	御子柴 善之	ドイツ近現代哲学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・准教授	小村 優太	アラビア哲学・宗教哲学	博士(東京大学)
審査委員	学習院大学・名誉教授	酒井 潔	ドイツ近現代哲学	博士(京都大学)